

# 序 論

- 1 策定の趣旨
- 2 計画の概要
- 3 伊東市の主要課題等

# 1 策定の趣旨

伊東市では、平成13年3月に平成22年度を目標年次とする第三次伊東市総合計画を策定し、将来像「住みたい 訪れたい 自然豊かな やすらぎのまち 伊東」の実現を目指し、各種の施策を推進してきました。

この間、地方自治体を取り巻く環境は、人口減少社会の到来、少子高齢化の進行、地球規模での環境問題の顕在化、国・地方財政のひっ迫、生活様式の多様化や個人意識の変化など、様々な面で急激に変化しています。

一方、地方分権の一層の進展に伴い、国と地方の関係も大きく変わりつつあり、これからの地方自治体は自らの判断と責任の下、地域の活性化に取り組み、市民との協働により、魅力あるまちづくりを実現することが求められています。

伊東市では、<sup>※1</sup>PDCAマネジメントサイクルによる施策・事業等の見直しに取り組み、<sup>※2</sup>経常経費の削減や事業の選択・集中化に努めてきたところですが、現在の厳しい社会経済環境の下、今後についても行財政改革を徹底し、長期的視野に立った安定的で持続可能な行財政運営を図っていくことが求められています。

これまでの総合計画は、施設整備や地域振興、行政サービスを「どのように展開するか」を中心に策定された資源分配型の計画となっており、社会資本整備の面においては大きな役割を果たしてきました。

これからの総合計画は、市民満足度をより高めるため、計画の策定段階から市民の皆さんの声を大切にするとともに、市民や企業等と行政が取り組むまちづくりの指針であることが求められます。

※1 PDCAマネジメントサイクル:計画の作成、計画にのっとった実行、実践の結果を目標と比べる評価、そして発見された改善すべき点を是正する4つの段階を繰り返すことで、業務効率を向上させる行政評価手法の一つ。「計画」(Plan)、「実施」(Do)、「評価」(Check)、「改善」(Action)の頭文字をとったもの

※2 経常経費:人件費、物件費、維持補修費、扶助費、公債費など毎年度連続して固定的に支出される経費

第四次伊東市総合計画は、こうした背景を踏まえ、平成32年度を目標年次とする新しい伊東市の将来像を描き、その将来像を実現するための目標を定めるとともに、限られた資源の中で、目標達成のための手段を選択・集中化した上で、それぞれの施策が「市民の皆さんにとってどれだけの効果があったのか」を評価し、次の取組等への見直し・改善にいかしていくことを特長とするなど、以下の3つの視点をもって策定しました。

## ●目指すべき目標の設定、達成状況の評価、次の施策への反映

将来像を実現するための目標と、その達成状況を表す成果指標を定め、その評価結果を次の施策等に反映するなど、いわゆる目的指向型行政運営に基づく計画としました。

## ●優先的かつ重点的に取り組むべき事項の提示

計画期間中に特に実現したい施策、時代に合った高い行政効果が見込まれる施策などを重点施策として提示しました。

## ●市民の声の反映と計画づくりへの参画

市民生活の安定、向上、活力あるまちづくりの実現を目指すため、市民アンケートの実施や市民会議の開催など、市民の意向を尊重した計画づくりに努めました。

# 2 計画の概要

## 1 計画の構成

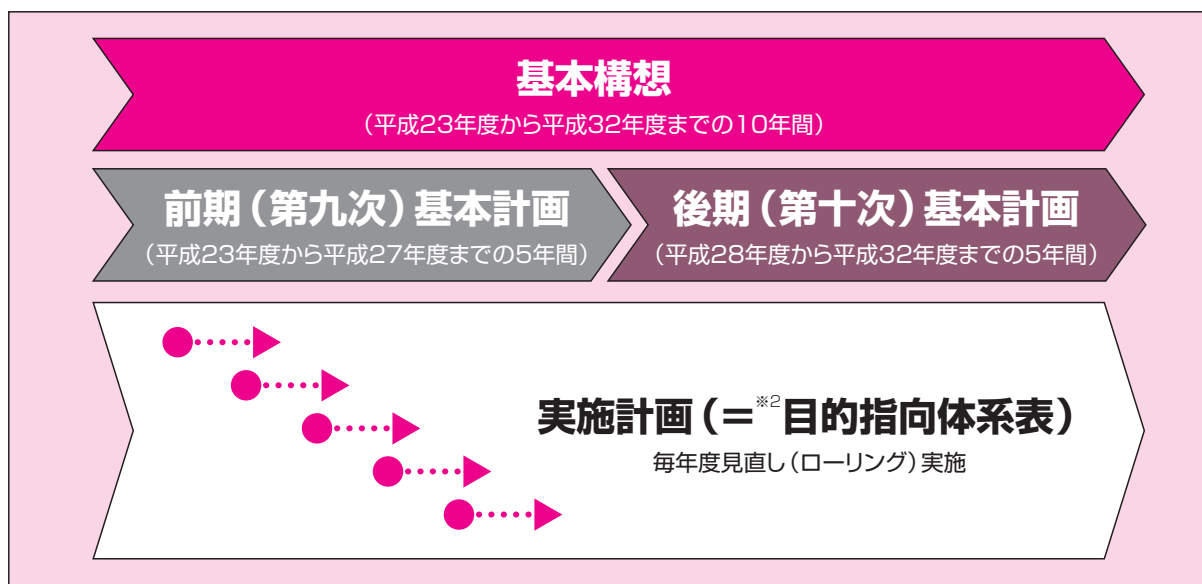
第四次伊東市総合計画は、伊東市の将来像及びその実現の方向を示した政策大綱等から成る「基本構想」、基本構想を実現するための各分野の施策・目標等を体系的に明示した「基本計画」、さらに、基本計画の施策の達成状況を具体的に管理する「実施計画」から構成されます。

## 2 計画の期間

基本構想は、平成23年度(2011年度)から平成32年度(2020年度)までの10年間とします。

基本計画は、前期・後期の各5年間で計画期間とし、必要に応じて内容の見直しを行います。

実施計画は、毎年度、検証、再評価(\*1ローリング)を行います。



※1 ローリング:現実と長期計画のずれを埋めるために、施策・事業の見直しや部分的な修正を、毎年転がすように定期的に行っていく手法のこと。

※2 目的指向体系表:組織の目的と手段を示すとともに、達成目標を明示し、その成果を評価し、行政運営改善のための分析を行えるように示した行政評価の一手法のこと。

## 3

## 伊東市の主要課題等

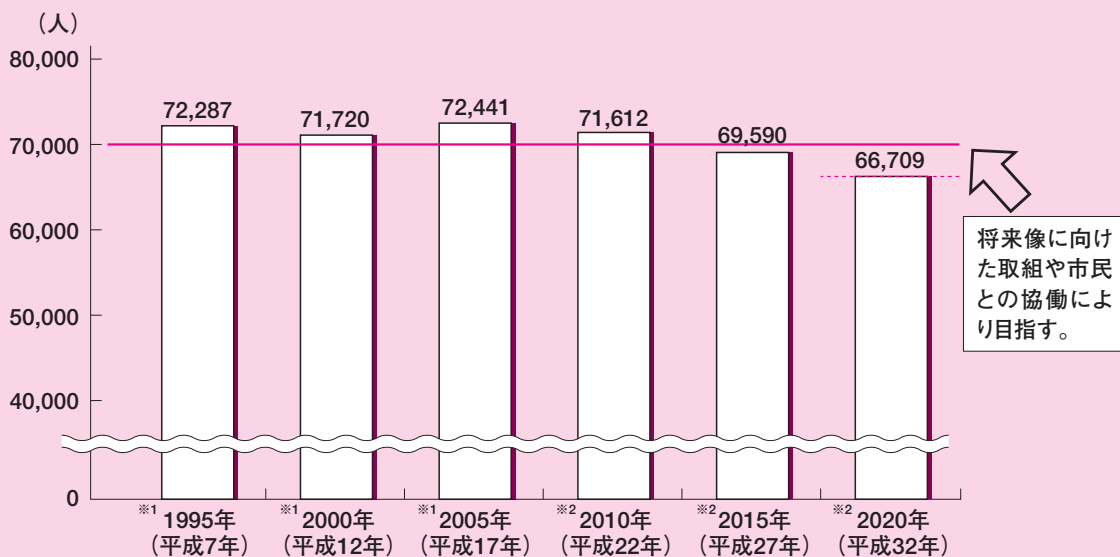
## 1 人口の見通しと目標人口

平成17年(2005年)国勢調査における伊東市の人口は、72,441人となっています。

今後、国内人口と同様に伊東市の人口も減少すると予想され、国立社会保障・人口問題研究所の市区町村別将来推計人口によると、計画の最終年である平成32年(2020年)には約67,000人になると推計しています。

そこで、今後10年間、出産・子育て支援の充実や地域医療の充実、交流人口の拡大等、本構想で描く将来像に向けた取組に努め、市民との協働を推進することにより、平成32年(2020年)における伊東市の人口として **70,000人** を目指します。

国立社会保障・人口問題研究所による将来推計人口



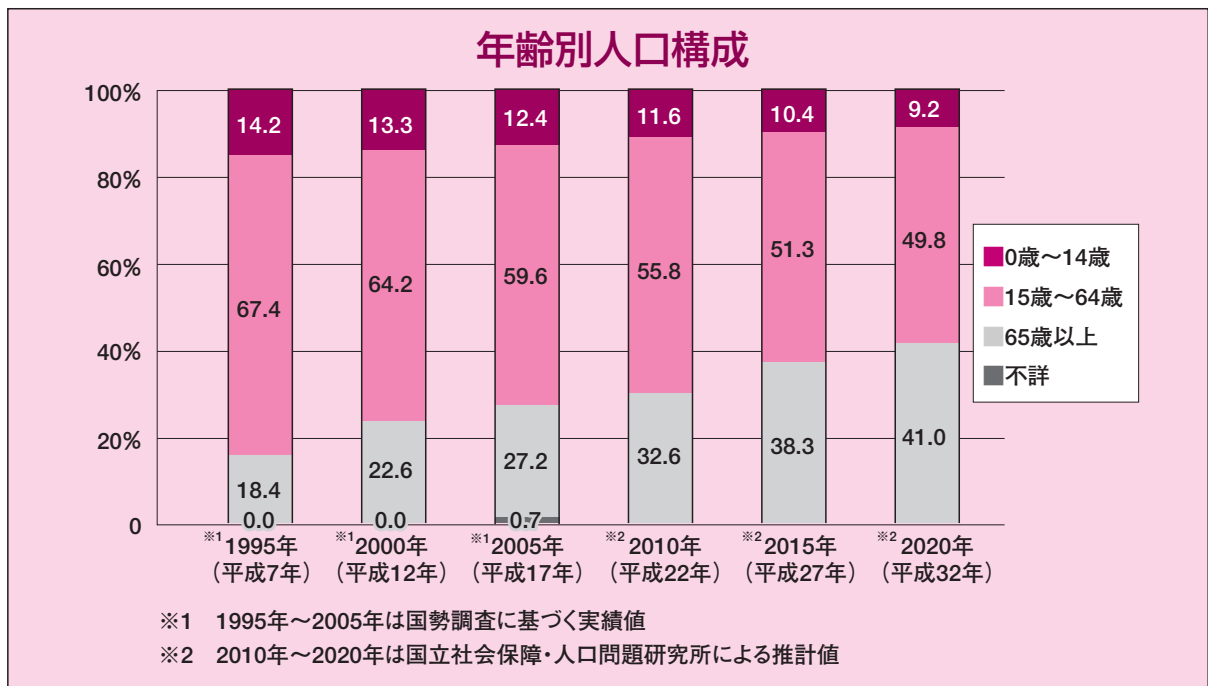
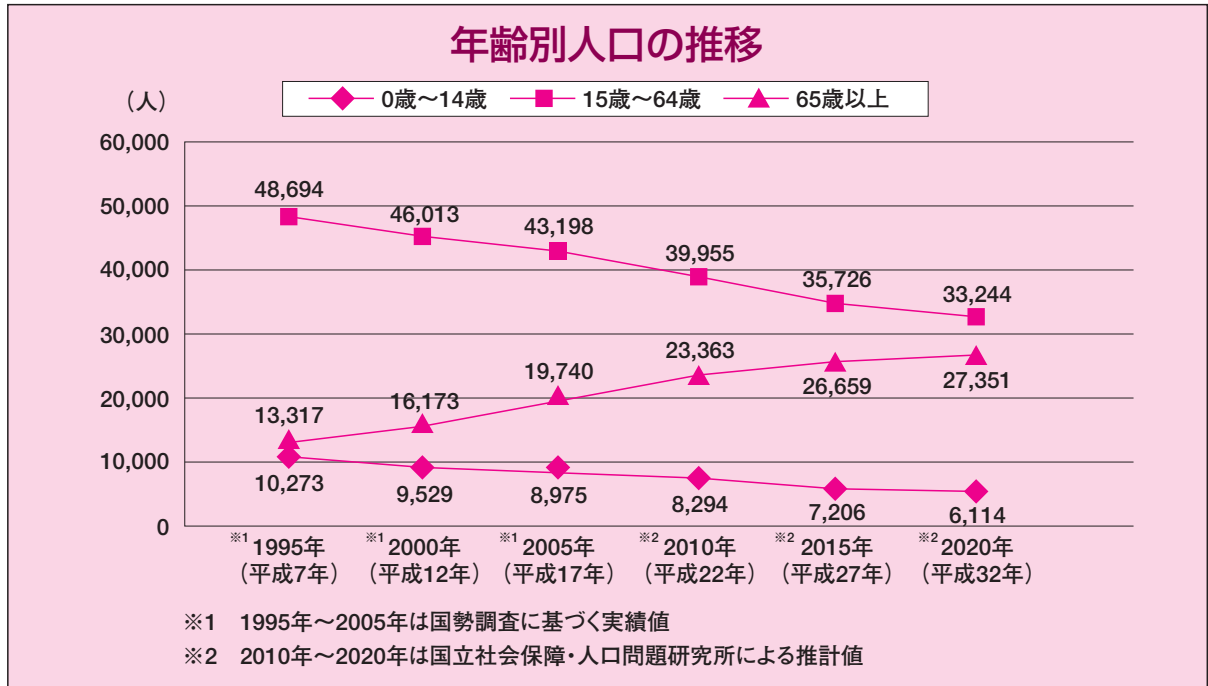
※1 1995年～2005年は国勢調査に基づく実績値

※2 2010年～2020年は国立社会保障・人口問題研究所による推計値  
なお、2010年の国勢調査(速報値)は71,439人

### (参考) 国立社会保障・人口問題研究所の推計人口

年齢別の人口について、今後も年少人口(0歳～14歳)の減少と老年人口(65歳以上)の増加により、少子高齢化の傾向は一層進むと推計し、平成32年においては、老年人口が約27,000人と年少人口の約6,000人の4.5倍に達し、伊東市人口の2.5人に1人が高齢者になると推計しています。

また、伊東市の労働力を支える生産年齢人口(15歳～64歳)は、平成7年の48,694人をピークに減少し、平成32年には約33,000人になると推計しています。



## 2 主要課題

第四次伊東市総合計画策定に際し、市民の声を反映させるための<sup>ゆめ</sup>未来づくり市民会議や市民意向調査などの意見を踏まえ、伊東市の主要課題を次のとおり抽出・整理します。

### ア) 本格的な少子高齢社会への対応

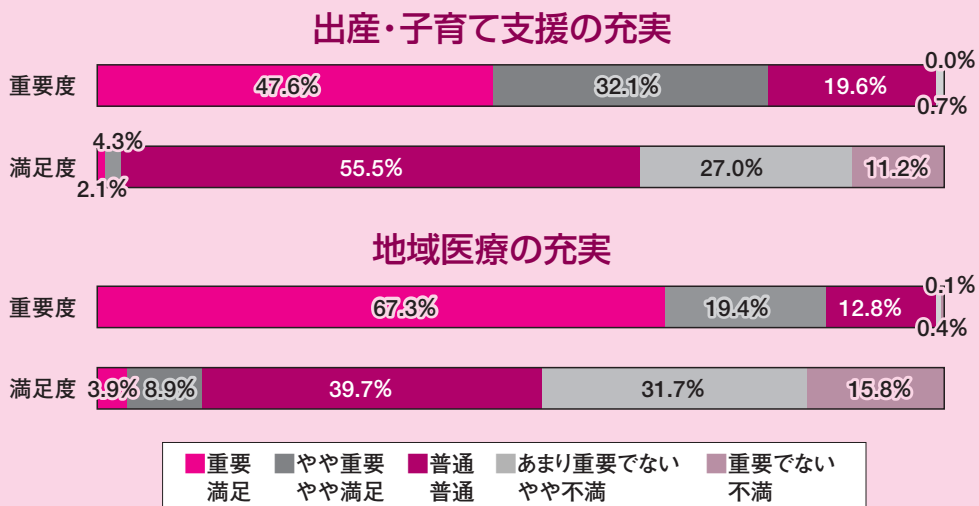
人口減少や少子高齢化の進行は、労働力人口の減少や経済規模の縮小など、社会経済、ひいては地方財政に大きな影響を及ぼすことが予想されます。

伊東市においても、少子高齢化は今後急速に進行すると予想され、その対応が喫緊の課題となっています。

この点について、市民意向調査では「出産・子育て支援の充実」と「地域医療の充実」に関する重要度が高いにもかかわらず、現状への満足度が低いという結果となっており、伊東市の特色をいかした施策をより重点化して取り組んでいく必要があります。

#### (参考) 平成21年度 市民意向調査結果

～これからの伊東市の取組に対する「重要度」と現在の伊東市の取組に対する「満足度」～



注記: 数値は、端数を四捨五入しているため、合計が100パーセントにならない場合があります。

今後の対応として、子育て支援や若者の定住・移住化促進を積極的に推進するとともに、市民の健康志向に対応し、温泉施設やスポーツ施設をベースに、市民自らが健康づくりに取り組むことができる環境を整備するなど、これまで以上に保健・医療・福祉サービスを充実していくことが求められます。

さらには、温暖な気候、豊かな自然環境、景観、温泉という強みをいかし、新市民病院を核に医療と観光が連携した新しいサービスの提供を図るなど、高齢社会に対応した新たな取組により、住む人にとっても訪れる人にとっても、だれもが健康であることを実感できるまちづくりを進めていく必要があります。

## イ) 安全・安心に対する不安感の解消や 環境問題への対応

地球温暖化が原因とみられる異常気象の増加や東海地震、群発地震等も想定されることから、市民の災害への不安は高まっており、防災対策の充実が求められます。

平成21年度の市民意向調査において、伊東市の「消防・救急体制の強化」と「地域の災害対策の充実」の取組は、ともに満足度の上位にあります。近年、地方自治体に求められる災害対応の範囲は、自然災害に加え、社会的・人為的災害（危機）へと広がってきており、幅広い対応が求められていることから、\*伊東市国民保護計画等も踏まえた一層強固な防災対策と危機管理体制の構築が重要となっています。

一方、環境問題に対する意識や快適な住環境を求める傾向が高まる中、環境負荷を抑えつつ快適に暮らせる社会基盤を整えていくことが求められています。

今後とも、伊東市の持つ良好な住環境という強みをいかしながら、住む人にとっても訪れる人にとっても安全・安心、快適なまちづくりを進めていく必要があります。

---

\*伊東市国民保護計画:武力攻撃事態等における国民の保護のための措置に関する法律(国民保護法)に基づき伊東市が策定。市の地域における武力攻撃事態等に対処するため、平素からの備えや予防、応急対策及び復旧・復興等について総合的かつ計画的な対策を定めている。



## (参考)平成21年度市民意向調査結果

～現在の伊東市の取組に対する「満足度」上位5位～

順位	項目
1	安全でおいしい水の安定供給
2	消防・救急体制の強化
3	ごみ対策の充実
4	史跡・郷土芸能の保存
5	地域の災害対策の充実

## ウ) 固有の地域資源を最大限活用した 地域の魅力の情報発信

社会経済環境が大きく変化しても、人々が地域社会の中で学び・伝え・活動し、様々な分野で生きがいを求め続ける傾向に変わりはありません。

伊東市の強みは、豊かな自然や\*伊東八景などの景観、温泉、歴史・文化遺産、著名人ゆかりの地などが存在することに加え、これらの地域資源を活用した市民活動が、首都圏等からの多彩な人材の移住などにより、活発に行われていることであるといえます。

今後も、退職した団塊の世代が伊東市の良好な環境を求め、さらに、移住する可能性も考えられることから、旺盛な市民の学習意欲に対応し、子どもから高齢者までが地域の自然・歴史・文化に親しみながら、保護・活用・継承を図るとともに、世代・地域の分け隔てない交流の活発化を図り、人材を掘り起こしながら地域を支える人づくりに取り組んでいくことが重要です。

このように固有の地域資源を最大限活用し、その魅力によって地域が輝き、魅力あるまちとして市内外に情報発信することで、また新たな人材を呼び起こしていくことが求められます。

\*伊東八景:伊東の代表的な景観八か所のこと。大室山、小室山、城ヶ崎、松川、汐吹き、一碧湖、オレンジビーチ、巢雲山

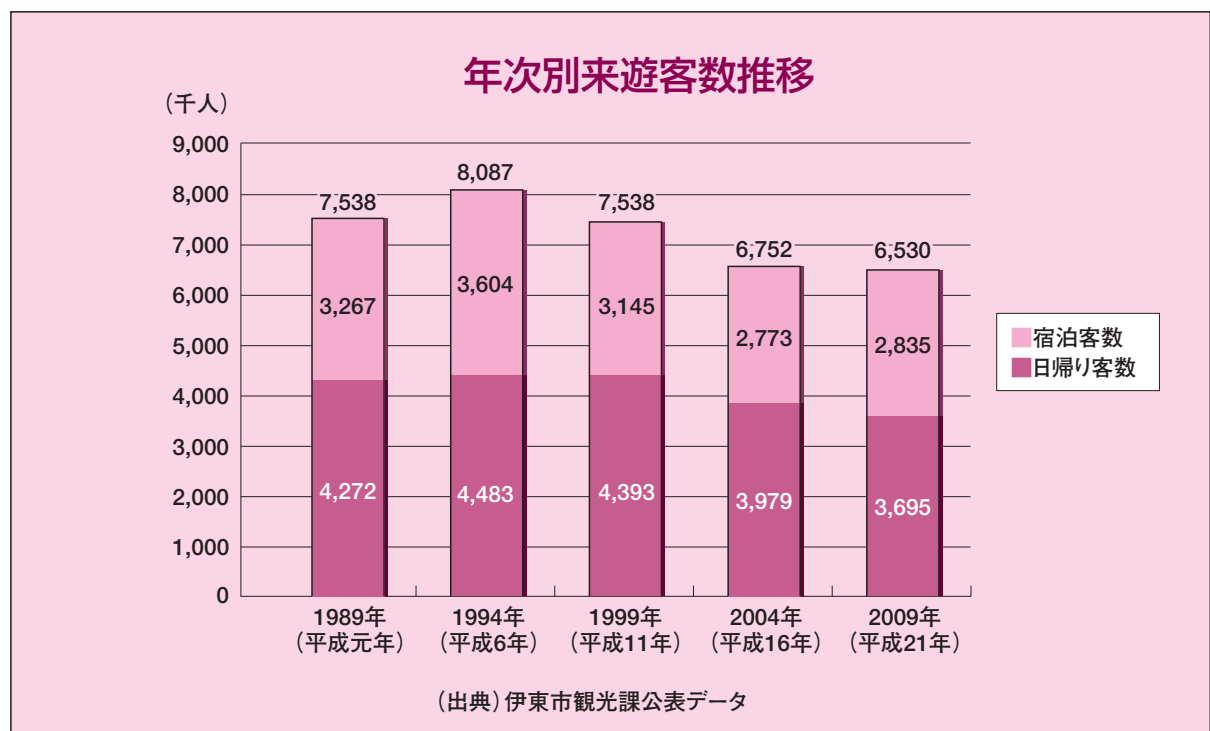
## エ) 観光交流を主軸にした地域活力の向上

観光は、21世紀の基幹産業といわれています。新興国の経済成長を背景に、特に中国を中心とする東アジア圏からの旅行者が増加する中、これらの地域との友好関係を深め、交流を更に促進することが課題となっています。

また、観光交流人口の増加を地域内の消費に結びつけ、観光産業はもとより、交通産業や小売業など、裾野の広い分野で地域経済に波及効果をもたらすための取組が必要となっています。

一方で、団体から個人旅行へと人々の観光行動が変化する中、多様な体験型プログラムを地域からプロデュースし、観光客がゆったり滞在することで地域が潤う\*着地型の観光地づくりが注目されています。

今後は、伊東市を訪れる外国人旅行者のニーズにきめ細かに対応した観光地としてのまちづくりを実現するとともに、外国との往来を活用した相互交流を進める必要があります。また、固有の地域資源を有効活用し、農林水産業等の他産業との連携による新しい観光を展開するなど、観光を主軸に地域活力の向上を図る必要があります。



\*着地型の観光地: 地域ならではの各種体験、地元産品等の観光資源を活用した旅行商品づくりや魅力的な広報・情報発信など、旅行先の地域が主体となった観光。これまでは、旅行者のニーズを把握し情報を発信するのに便利な「発信型」が大半だったが、消費者の志向が多様化するのに伴い、地元の人しか知らないような穴場や楽しみ方を提供する「着地型」が注目されている。

## (参考)伊東市の※SWOT

(未来づくり市民会議・各種アンケートで出された意見を基に分析)

### S《強み》(Strengths)

- 豊かな自然環境、自然景観、自然との共生
- 豊かな森林、豊富な酸素
- 澄んだ空気、満天の星空
- 自生している原種が豊富
- 美しい日の出
- 立地条件が良い(首都圏から2時間以内)
- 温暖な気候、良好な住環境
- 観光資源の充実(温泉)
- 民間の観光施設が充実(公園)
- 多彩な地域観光行事の存在(観光イベント)
- 豊富な特産品(みかん、干物、菓子類ほか)
- 企業の研修所、保養所が多い
- スポーツ環境が良い(ゴルフ場、マリンスポーツ)
- 著名人の別荘が多い
- 文化、歴史遺産が多い
- 活発な地域サークル活動
- 水がおいしい

### W《弱み》(Weaknesses)

- 平地が少なく傾斜地が多い
- 人口減少
- 青年層の流失
- 高い高齢化率、少ない若年層
- 基幹産業の偏り(観光)
- 企業の少なさ
- 就職機会が少ない
- 地産地消の仕組みがなく  
地元で食材が出回らない
- ぜい弱な公共交通(鉄道:本数が少ない。  
バス:運賃が高い)
- 市外の医療機関を受診する人が多い
- 市民向け公共施設が少ない

## SWOT

### O《機会》(Opportunities)

- 経済のグローバル化による  
海外企業誘致の可能性
- 環境意識の高まり
- 健康志向の高まり
- 中国人の海外旅行者の増加
- 地方分権の推進  
(地域の独自性の発揮の可能性)
- 団塊世代の大量退職  
(地域社会への貢献期待)
- 伊豆観光圏の連携
- 伊豆半島ジオパーク構想
- 新市民病院の建設
- パワースポットの開拓

### T《脅威》(Threats)

- 少子・高齢化社会の進行
- 経済のグローバル化による  
生産拠点移転・企業流失
- 不況による企業等の倒産
- 団塊世代の大量退職
- 犯罪の増加と凶悪化
- 交通網整備による立地の優位性の低下  
(伊豆縦貫道の開通)
- 不況による観光客の減少
- 中心市街地の衰退
- 地方交付税の減少
- 群発地震の発生

※SWOT:組織のビジョンや戦略を企画立案する際に利用する現状を分析する手法の一つ。Strength(強み)、Weakness(弱み)、Opportunity(機会)、Threat(脅威)の頭文字を取ったもの。個別施策の検討の際には、上図の分析を基本として、機会をいかし、強みを強化する視点や、脅威を回避し、弱みを克服する視点が必要とされる。

## 【大室山】



伊豆高原のどこからみてもお椀をふせたような柔らかな曲線のシルエットが美しい大室山。標高580mの山頂に直径300mのすり鉢状の噴火口を持ち、全山<sup>※1</sup>カヤにおおわれている。約3,700年前の噴火で形成された<sup>※2</sup>スコリア丘で、ほぼそのままの状態で保存されていることなどが評価され、平成22年8月に国の天然記念物に指定された。

※1 カヤ：榧。イチイ科カヤ属の常緑針葉樹

※2 スコリア：火山噴出物の一種で、塊状で多孔質のものうち暗色のもの。岩滓（がんさい）ともいう。